

## 【エッセイ・回顧】

# ありがとう—留学生別科の学生とともに—

愛知大学文学部文学科 昭和 62 年卒 久野 かおる

## はじめに

愛知大学短期大学部留学生別科は 1988 年（昭和 63 年）に開設された。留学生たちが、日本の大学、大学院に進学するために、在籍期間 1 年で日本語・日本事情を習得する進学予備教育機関である。定員は 30 名で、開設当初は 1 クラス構成だったが、1990（平成 2）年度から開講前にプレースメントテストが実施され、2 つのクラス（A・B）で授業が行われた。

開設から 14 年経過したところで、2002（平成 14）年度から新たに全学的な組織、愛知大学外国人留学生別科となり、2005（平成 17）年度まで存続した。

私は開設から 17 年間非常勤講師として関わらせていただいた。現在も日本語教育の一端にいる私にとって、この 17 年間は留学生とともに成長してきた貴重な年月である。中国、韓国、台湾、マレーシア、タイ、ミャンマー、インドネシア、フィリピン、インド、バングラデシュ、ブラジル、ボリビア、イギリス、イタリア、ドイツ、アメリカ、ニュージーランドと実に様々な留学生との出会いが今の私を支えている。留学生たちには心から感謝している。

昨年（平成 28 年）11 月に、愛知大学東亜同文書院大学記念センター・フェロー、愛知大学名誉教授でいらっしゃる藤田佳久先生をはじめ、20 代、30 代の卒業生たちに、留学生別科の話をした際、あまりに実態が知られていないことに愕然とした。留学生別科を風化させてはならないと思った。

2017 年（平成 29 年）は、私にとって節目の年である。愛知大学を卒業してちょうど 30 年が過ぎ、日本語教師となって 30 年目となる。今こそ原点回帰の時である。

組織的、数値的な記録は大学側にお任せし、拙稿では、愛知大学短期大学部留学生別科の 14 年間に焦点を絞って、当時を振り返りたい。

## 1. 愛知大学短期大学部留学生別科非常勤講師の道へ

私が愛知大学文学専攻科を修了した年に短期大学部留学生別科が開設されることになった。文学専攻科を修了した 4 名のうち 1 名は愛知県立高等学校国語科教諭に採用が決まっており、私を含む 3 名が留学生別科の非常勤講師として採用され、授業を担当することになった。

今や日本語教師の採用条件とうたわれる日本語教育能力検定試験も、当時は始まったばかり

かりで、他大学学部日本語教員養成課程があったのかなかったのか、日本語教師養成講座 420 時間修了も一般的ではなく、まして 3 名とも文学専攻科修了とはいえ、大学院修士課程の修了ではない。3 名が採用された背景には、私たち卒業生を信頼してくださった三浦八千代先生をはじめ短期大学の先生がたのお覚悟とご決断があればこそ、その後もずっと未熟者を見守り、支えてくださったことに感謝するのみである。

当時、日本語教育はまだ発展途上で、日本語教科書も参考書も今のように多種多様ではなく、専ら山内啓介先生が教えてくださった日本語教育学会編『日本語教育事典 縮刷版』（大修館書店）、国際交流基金編『教師用日本語教育ハンドブック』、森田良行著『基礎日本語辞典』（角川書店）、寺村秀夫企画・編集『日本語文法 セルフ・マスターシリーズ』（くろしお出版）を参考にしていた。3 名とも山内先生のゼミで鍛えられていたが、各種日本語教授法や日本語教育の知識について、先生は折に触れご教示くださった。

留学生別科 1 年目の授業中で、私より年上の学生（中国、女性）に質問され、「あなたには説明できないでしょ！」と言われたことがあった。確かに、ポイントを的確に答えられない自分が情けなく、悔しかった。授業後、私の様子がおかしかったのか、間瀬惇先生に「どうされましたか？」と問われ、思わず涙がこぼれた。どうしたら彼女を納得させられるか懸命に考えた。そして、次の授業の時に、再度説明を試みた。彼女も他の学生たちも笑顔で納得してくれた。

しかし、1 年目、2 年目の私は日本語教師を続けようとは思っていなかった。私はどうしても高校の教員になりたかった。文学専攻科修了後、愛知県立常滑高等学校でも非常勤講師として国語の授業を担当し、やんちゃでお茶目な高校生を相手に奮闘していたのだ。

転機は 3 年目であった。それまでもいい加減な気持ちで授業に臨んでいたわけではないのだが、留学生別科の授業が楽しくなってきたのである。山内先生のご助言により、後述する「留別新聞」の作成も始め、もっと留学生のそばにいたいと思うようになったのだ。

## 2. オリエンテーションキャンプ

JR 飯田線三河大野駅を下車してすぐの高台に「鳳来セミナーハウス」があった。毎年、留学生別科の行事として、黒柳孝夫先生を中心にオリエンテーション（留学生別科の履修・生活案内）を実施し、教職員と学生たちが寝食を共にし、親交を深めていた。＜資料 1・2 参照＞

食事の準備や後片付けなどは、仕事の分担を決めて行った。一例として、夕食の準備の分担を示す。

- ①お湯をわかす人
- ②ご飯を炊く人
- ③コップ、皿、箸、茶碗などを並べる人
- ④ホットプレートを準備する人
- ⑤ビール、ジュースなどを準備する人
- ⑥調理する人（肉や野菜などを切る）
- ⑦調理する人（味噌汁を作る）

みんなでおしゃべりをしながら、わいわいと食べたり、飲んだりして、日ごろ一人で食

事をしている学生たちはとても嬉しそうだった。夜通し、おしゃべりをしていた学生たちもいた。授業とは違う学生の様子が垣間見られて、私自身が楽しんでた。しかしながら、ホットプレートの洗浄は時間のかかる大変な作業であった。

三河大野から湯谷まで歩いた年、阿寺の七滝まで歩いた年、いずれの年も楽しい思い出となっている。

### 3. 「留別新聞」

山内先生のご助言により、1990年（平成2年）9月に「留別新聞」を発行することになった。留学生別科の出来事や先生がたのお話など、いろいろなことを学生たちに伝えたいと思い、学生たち自身に読んでもらうため、紙面はB4用紙1枚とし、漢字にはすべてルビを付けた。＜資料3参照＞

留学生別科非常勤講師であった鈴木昌代氏、中井恵里子氏とともに留別新聞編集係として、毎月1回発行していた。二人が留学生別科を辞めた後も、発行を続けた。短期大学の先生がたの中には、発行を楽しみにしてくださる先生もいらっしやった。

まだパソコンのない時代で、ワープロで文章を打ち、お互いの記事を用紙に切って貼り付け印刷するという作業をしていた。

留学生別科の授業科目に、「ワープロ実習」（後に、「文章表現実習」）という科目があり、私も担当していたので、「留別新聞 修了記念号」には、教職員の祝辞とともに、学生たちがワープロで打ったメッセージを切って貼り付けて、発行することにした。＜資料4・5参照＞

留学生別科修了後、愛知大学や他大学に進学した学生たちの中には、国立大学の大学院で博士号を取得し、国内外の大学で教鞭をとっている者もいれば、日本の企業で頑張っている者もいる。果たして彼らは留学生別科のことを覚えてくれているだろうか。

今も私の手元にある「留別新聞」は、留学生別科の史料である。毎月、学生たちに何を伝えようとしていたのか、どんな行事があったのか、そのときどんな思いで記事を打っていたのか、懐かしい記憶が蘇る。

「留別新聞」は、学生たちにわかる日本語で、学生たちがわかる語彙を使って文章を作成するという、日本語教師としての軸を作ってくれた。また、学生とともに川柳や詩なども作り、表現の幅を広げることができたと思う。

### 4. 『愛知大学 初級日本語』

留学生別科の初級日本語教科書は、開設初年度から1991（平成3）年度までの3年間、海外技術者編集協会編『日本語の基礎Ⅰ』、『日本語の基礎Ⅱ』（スリーエーネットワーク）を使用した。この教科書は、各課に文型が提示され、それを積み重ねながら学習を進めることができるので、学習者にとっても教授者にとってもわかりやすく、また口頭練習中心に作成されており、日本語の運用力を効果的に高めることができ、かつ各国語版の訳および文法解説書があるため、学習者の自習にも効率的であると思われた。

しかし、そもそも技術研修生向けに開発された教科書であり、語彙（例えば、「ペンチ・スパナ」）や会話場面（例えば、研修センター）など、留学生別科の学生にそぐわないものもあり、また授業予定を組み立てる上で、留学生別科の学年暦と合わない点もあった。

そこで、留学生別科独自の初級日本語教科書を作りたいという思いが芽生え、愛知大学短期大学部留学生別科運営委員会承認の下、間瀬惇先生を中心に、愛知大学短期大学部留学生別科テキスト編集会議が組織された。私も一員となり、作成・編集作業に当たることになった。1990年（平成2年）から2年にわたり、山内先生ご指導の下、①文型の選定、②文型提出順序の決定、③体裁・構成の検討、④会話文・練習問題作成の作業を進めた。文型の選定と提出順序の参考にしていたのは、主に以下のものである。

日本語教育学会編『日本語教育事典 縮刷版』所収「文型一覧」p.267－273

大阪外国語大学留学生別科編『基本文型』

京都外国語大学留学生別科編『日本語基本文型』

国際交流基金編『日本語教科書ガイド』所収「初級教科書各課提出文型・文法事項一覧

私にとって、上記の作業は産みの苦しみであった。何度も文型を付き合わせ、ああでもないこうでもないという検討を繰り返した。その結果、間瀬先生が学年暦から割り出してくださった課数、36課構成、学習者の学習段階を踏まえた4段階構成（4分冊）、登場人物と場面を設定した会話作成が決まった。凡例、目次、導入部「日本語の勉強を始めましょう」は間瀬先生が作成してくださった。

そして、ようやく私たちが自分の手でワープロ入力した試行本油印版「愛知大学 初級日本語」が完成し、1992年（平成4年）4月から使用することができた。＜資料6・7参照＞私たちは次年度の刊行を目指し、すぐに改訂作業に取りかかった。使用語彙や会話文などの見直し、索引の作成に尽力した。どこをどのような理由で変更したいのか、共同研究室（研究館1階128）で間瀬先生に何度も時間をかけて相談し、承諾を得た。索引の作成にあたっては、迫田耕作先生からパソコンの手ほどきを受けた。初めはマウスがうまく使えず、妙な箇所をクリックして、迫田先生に苦笑されていた。

新たな『愛知大学 初級日本語』には、間瀬先生が日本事情科目用に作成された「読み物」も盛り込むことにし、1993年（平成5年）4月に刊行することができた。＜資料8参照＞

苦しい作業を繰り返す中、私がうれしかったのは、学生たちが教科書の完成を喜んでくれたこと、しっかりと学習してくれたことである。会話文を丸々暗記する学生もいたほどで、どれだけ励みになっていたことか。

山内先生、鈴木氏と私は、共同研究室で提示文と会話文を音読し、カセットテープに録音する作業も進めた。そして、『愛知大学 初級日本語』の補助教材となる『かんじのれんしゅうⅠ・Ⅱ』、『れんしゅうもんだいⅠ・Ⅱ』、『ききとりもんだいⅠ・Ⅱ』を作成、続けて「ワープロ実習」の授業で使用するテキスト『愛知大学短期大学部留学生別科 ワープロ実習』も作成していったのである。＜資料9参照＞私たちの思いを受けとめ、何かと便宜をはかってくださった黒柳先生、杉本裕重事務長には心より感謝している。

授業外にこれらの作業に携わったことで、日本語の文型や語彙などが自然に私の中に吸収されたことは間違いない。

## 5. 日本語能力試験

毎年12月に行われる「日本語能力試験」の1級（4級、3級、2級、1級の4段階）に合格することは、留学生別科の学生に限らず、日本の大学、大学院への進学を目指す留学生にとって命がけの試験である。それは日本のほとんどの大学が受験資格としていたからだ。日本の国立大学に進学したい学生は、さらに「私費外国人留学生統一試験」という、いわゆる大学入試センター試験のような試験も受験しなければならなかった。

「日本語能力試験」の1級は、学習時間900時間以上、語彙数1万語、漢字数2千語が目安とされていた。4月に入学した学生たちが、資格外活動（アルバイト）をしながら、わずか8ヶ月で受験しなければならないのだ。留学生別科は予備校のように受験偏重で授業をする機関ではない。あくまで「話す、聞く、読む、書く」の四技能を総合的に伸ばし、日本語の運用力を高めることに力を入れていた。しかし、一方では1級合格を目指す学生たちのジレンマを和らげる必要もあった。授業外に質問したい学生もいたし、その気持ちに応えたいとも思った。そこで、時間と場所を設定し、模擬試験を実施したり、授業で使用するワークシートに練習問題を入れたりすることも始めた。

『愛知大学 初級日本語』の作成作業で共同研究室にいる時間が多くなったこともあり、授業外に学生たちが質問に来ることも度々であった。時には、テニスコートの横にあるベンチ（現在は梢風館がある場所）で、日向ぼっこをしながら数々の質問に答えることもあった。「AとBは何が違うのか、どうしてCが正答ではないのか」など、学生たちの質問には鍛えられた。質問も答えもすべて日本語でやり取りをしていた。お互いに伝えようと努力し、言葉を選び、わかろうとして必死に耳を傾ける。何と優秀な学生たちだったのだろう。私の日本語力と教育力を高めてくれたのは、学生たちなのである。

「日本語能力試験」の当日は、豊橋駅から短期大学部事務室の留学生別科担当者が試験会場（名古屋大学）まで引率してくださり、何と杉本事務長が引率してくださった年もある。私も名鉄名古屋駅改札で豊橋からの到着を待ち、同行した。名古屋市営地下鉄で本山駅まで移動し、本山駅から試験会場までは徒歩15分程度。他の受験生もぞろぞろと歩いていく中で、とにかく学生たちを励ますことしかできなかった。試験が終わるまで、試験会場の出入り口にいた。そこには、他の日本語学校の教師たちも来ていて、まるで自分たちも受験生であるかのような緊張感が漂っていた。

ちなみに、現在の「日本語能力試験」（JLPT）は、科目も点数も変わり、N1からN5までの5段階となった。また、「私費外国人留学生統一試験」は廃止され、新たに「日本留学試験」（EJU）が始まり、大学の受験資格も、「日本語能力試験」（JLPT）N2以上合格、「日本留学試験」（EJU）の何点以上取得とうたわれるように変わっている。

## 6. クリスマス会

毎年12月の恒例行事として、クリスマス会を開くようになった。場所は記念会館の1階和室をお借りしたり、短大3号館（現在の7号館）2階の教室で行ったりした。

留学生別科の教職員をネタにした○×ゲーム、輪ゴム渡しゲーム、色紙の交換など、楽しい時間を過ごし、みんな一緒にクリスマスケーキを味わった。＜資料10参照＞



クリスマス会の他に、生活科の高桑稔子先生にご無理をお願いし、調理室をお借りして、学生たちといっしょに水餃子を作ったこともあった。七夕会では、短冊に願い事を書いて、笹竹に飾り、外で写真を撮った。

教職員と学生が一同に会して共に何かをするということは非常に意義のあることだと思っている。それゆえ、私はどこの教育現場へ行っても、次々と行事を取り入れ、教職員と学生を巻き込んで大変な思いをしながらも、学生と過ごす時間を大切にしている。

## 7. おわりに

拙稿をお読みくださった皆様は、日本語教師とは何と楽しい仕事なのだろうと思われたのではないだろうか。確かに喜びもあるが、そればかりではない。それでも私は前に向かって歩いてきた。私は日本語教育の世界に飛び込んでから、後付けで必要な資格を取得し、再び大学院に進学して学び、今も効果的・効率的な学習を模索している。ここまで継続できたのは、いつも恩師と留学生たちがそばにいて、励ましてくれたからである。

学生たちが私に言ったことばが忘れられない。

「先生、私たちは今、日本語の地下にいます。地下がしっかりしていなければ、高いビルはできません。」(中国、女子)

「先生が前で忙しく教えても、私たちのコップの量は決まっています。水はこぼれます。」(インドネシア、男子)

「学生たちと別れるのは、先生の宿命です。でも、また新しい学生と出会うでしょう。」(中国、男子)

私を支えてくださった皆様に、学生たちに、心からありがとうと言いたい。

## <参考資料>

久野かおる『随想歌—留学生に感謝します』新風舎 2005年

鈴木昌代「日本語基本文型と指導法—愛知大学留学生別科の実践—」愛知大学外国語研究室運営委員会編『愛知大学外国語研究室 紀要 第17号』1993年3月所収  
愛知大学豊橋語学教育研究室編「LL ニュース No.20 特集 日本語教育」1990年1月発行

「愛知大学同窓会名古屋支部会報 会報名古屋 第39号」2000年1月発行

### 久野 かおる (くの かおる)

昭和 62 年 愛知大学文学部文学科卒業

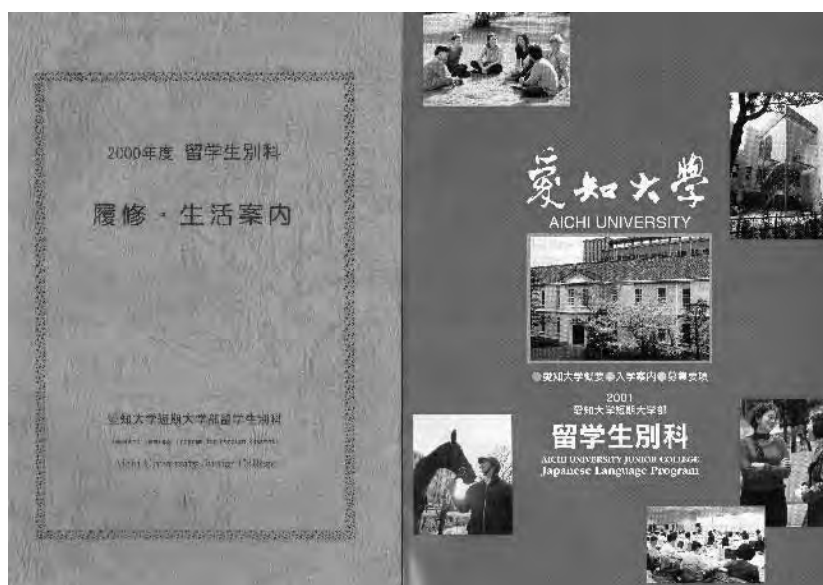
昭和 63 年 愛知大学文学専攻科修了

平成 10 年 愛知大学大学院文学研究科日本文化研究コース修士課程修了

平成 13 年 愛知大学大学院文学研究科日本文化研究コース博士課程満期退学

平成 29 年現在 学校法人茶屋四郎次郎記念学園 東京福祉大学名古屋キャンパス留学生日本語別科主任講師

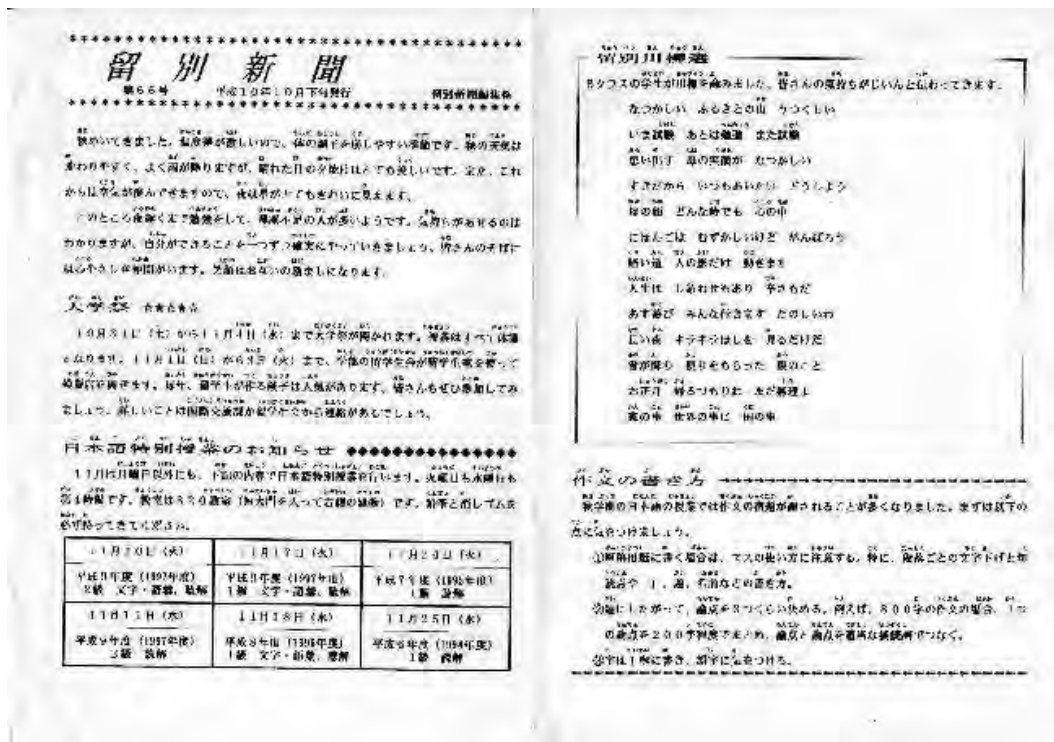
<資料1> 「2000年度 留学生別科 履修・生活案内」(写真左)と  
「2001 愛知大学短期大学部留学生別科 愛知大学概要・入学案内・募集要項」(写真右)



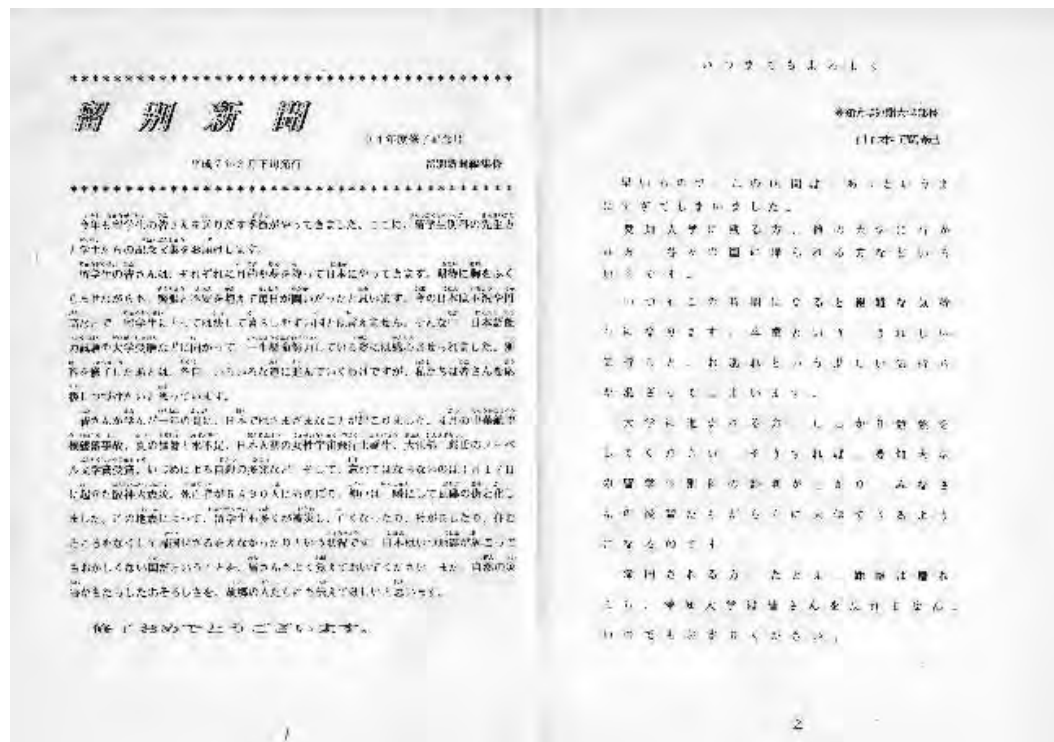
<資料2> 鳳来セミナーハウス玄関前で撮影



＜資料 3 参照＞ 「留別新聞 第 66 号」(平成 10 年 10 月下旬発行)



＜資料 4＞ 「留別新聞 1994 年度修了記念号」（平成 7 年 3 月下旬発行）





<資料 5> 「ワープロ実習」授業風景



<資料 6> 試行本油引版「愛知大学 初級日本語」



<資料 7> 共同研究室 →

<資料 8> 『愛知大学 初級日本語』



<資料 9> 各種補助教材 →



<資料 10> クリスマス会

